

News Letter

ニューズレター

No.
16

2026年7月発行

WEBサイトはこちら▼



新緑と新モニュメントに夏を感じます

お問い合わせ／広島大学大学院 人間社会科学研究科 教職開発専攻(教職大学院) 広報担当:又野 陽子
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7170 e-mail:yamatano@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/



インタビューの初めには、アイスブレイクも企画してくださったようです

新入生インタビュー

今年度入学した広島大学教職大学院の1年生に聞く

執筆 インタビュアー

谷口 悠真

(教育実践開発コース2年)

高木 温

(教育実践開発コース2年)

Q ご入学おめでとうございます。

まずはなぜ、広島大学教職大学院に入学されたのかをお聞かせしたいと思います。

太田 ●卒業論文でお世話になった先生とともに、教育相談や教育心理学をさらに深く学びたいという思いから入学しました。

中山 ●幼稚園という枠にとどまらず広い視野で学べると感じて入学を決めました。これまで

Q 現職院生はストリート院生と学んでみていかがですか。

中山 ●現職ストレートの違いはあまり関係ないと感じています。ストリート院生の柔軟な発想から多くの学びを得ています。

森 ●ストリート院生の強い志に刺激を受けており、「彼らが現場に来たときに幻滅されないよう、現場でも改善を続けなければ」と感じています。

Q これからの2年間でどのような研究をしていきたいですか。

坂口 ●議論を中心に、子どもたちが自分で社会を考える授業を開発したいです。

太田 ●友達同士がプラスの存在になれる協働学習を、どの教科でも使える形で研究したいです。

中山 ●幼児教育の意義を「見える化」するドキュメンテーションの研究を通して子ども自身の探究や保育の質の向上につなげたいです。

森 ●総合的な探究の時間を核に、カリキュラムや学校運営の在り方を模索していきます。

インタビューに
答えて下さった院生
(写真左手前より)

教育実践開発コース1年
(ストリート院生)
坂口 朝飛

教育実践開発コース1年
(現職院生)
中山 美充子

学校マネジメントコース1年
(現職院生)
森 由香里

教育実践開発コース1年
(ストリート院生)
太田 恵海

アクションリサーチ実地研究Ⅱ発表会(1年生) 課題研究報告発表会(2年生)

広島大学教職大学院では、学校現場での実践をもとに研究を深める「アクションリサーチ」に取り組んでいます。2月の発表会では、院生一人一人が教育現場で向き合ってきた課題や学びを発信しました。幼稚園から高校までの各校種・各教科に関する研究に加え、授業づくりや子ども理解、学校経営など幅広いテーマの研究結果が一堂に会し、来場者・院生・教員がともに対話を深めていました。

1年生によるアクションリサーチ実地研究Ⅱ発表会では、初めてのポスター発表に挑戦した院生たちが、自らの実践をもとに発表を行いました。発表を重ねる中で、「どのようにすれば自分の専門とする教科・校種以外の相手にも伝わるのか」を考えながら説明を工夫する姿が見られました。また、来場者から寄せられる質問や助言は、自身の研究を新たな視点から見つめ直す機会にもなり、研究を「伝える力」と「深める力」の双方の重要性を実感する場となりました。

一方、2年生による課題研究報告発表会では、2年間の学びの集大成として、理論と実践を往還しながら積み重ねてきた研究成果が発表されました。口頭発表後の質疑応答では、研究方法や結果の解釈、実践の意義などについて多様な観点から質問が寄せられ、発表者はこれまでの研究過程や得られた知見を踏まえながら自身の考えを説明していました。当時1年生の私たちにとっても、先輩方の発表は今後の研究の進め方や研究と実践を結び付ける視点について学ぶ貴重な機会となりました。



1年生のポスター発表の様子



2年生の口頭発表の様子

執筆 竹本 達也

(教育実践開発コース2年)

田島 光希

(教育実践開発コース2年)

ミニコーナー

院生室のレイアウトが変わりました!

この度、入学者数の増加に伴い、院生室のレイアウトを大幅に刷新しました!今回の変更で目指したのは、物理的にも心理的にも「風通しの良い」研究環境です。

最大のポイントは、用途に合わせた座席の配置です。窓際には、一人で深く思考に没頭できる「集中席」を設置。一方で、部屋の中央には「グループ席」を配置し、研究の悩みやアイデアを気軽に共有できる対話の場を設けました。さらに、移動式ホワイトボードも設置し、即席の議論もスムーズに行うことができます。

また、今回のリニューアルにより、2年生の現職も含め、全ての院生の皆さんがより活用しやすい環境が整いました。また、先生方も立ち寄りやすい環境になっていると思います。多様な経験や価値観を持つメンバーが同じ空間を共有することで、新たな知の交流が生まれることを期待しています。

一方で、全員が活用しやすい環境を維持するためには、院生全員の意識が重要です。レイアウト変更を出発点として、これからよりよい組織づくりを進めていきます。



院生室がガラッと変わりました

執筆 前園 彩花

(教育実践開発コース2年)

下川 美優

(教育実践開発コース1年)

「学校インターンシップ（海外編）」

主担当：岡村 美由規 先生

「学校インターンシップ」の海外編は、現地の学校現場や非営利組織の視察を通して、日本の教育や日々の自身の実践の在り方を問い直すことを目的とします。令和7年はドイツで行われました。デュッセルドルフ日本人学校、恵光幼稚園、ギムナジウム（日本の中等機関にあたる）、ミンスター大学、JETROデュッセルドルフ、ドイツ国際平和村を視察しました。特に同日本人学校では初等部・中等部にて授業を行ったほか、校長先生や地域連携担当教員よりご講話をいただきました。



授業風景（日本人学校小4 国語）

教育現場の視察だけでなく、JETROやドイツ国際村の視察をさせていただく中で、学校制度の背景にある社会情勢に関しても学ぶことができました。また、ドイツの学校には多国籍の児童生徒が在籍しているケースが多く、各視察先で「平和」をテーマに意見交流を活発に行いました。

2週間弱のドイツでの日々の中で、教育者として考え続けたい様々な問いが立ち上がりました。本授業を通して立ち上がった問いに対する答えを自分なりに考え続けることを通じて、平和な社会の担い手の育成に貢献していく所存です。

執筆 池田 誠

（教育実践開発コース2年）

渡邊 翠大

（教育実践開発コース2年）

教職大学院の授業・企画紹介

教育センター×教職大学院 コラボ研修

研修講師及び司会進行：池田 史志 先生、寺内 大輔 先生、岡村 美由規 先生、伊藤 優 先生

1月30日（金）、広島大学にて広島県立教育センターと教職大学院のコラボ企画「学校の明日がもっとワクワクに！経験年数を越えて、みんなで語って学び合い研修」が開催されました。

本研修は、年齢や経験年数の異なる教職員・学生同士の対話やワークショップを通じ、自己の在り方や学び合いの在り方の新たな気づきを醸成することを目的としており、これにより、各所属校でのOJL（On the Job Learning）の促進が目的とされています。

全3部構成のワークショップのうち、筆者は前半の第1部、第2部に参加しました。特に印象深かったのは、第1部の「色を使ったアクティビティ」です。1枚の紙に、「今後楽しみな仕事」と「なくなってもよいと思う仕事」を、色や形で描くワークを行いました。一人一人異なる色使いやタッチ、図形からは、それぞれの個性や大切にしたい価値観が感じられ、あえて非言語の表現を用いたからこそ、言葉にしにくい繊細な気持ちをアウトプットすることができました。また第2部のワークでは、机にランダムに置かれた様々な楽器を用いて、グループで1つの曲作りに挑戦しました。個々の強みを生かしながら共に作り上げる過程は、学級や学校という集団を動かすヒントを体感できる、貴重な機会となりました。どちらのワークでも、現職の先生方との活動を通じて、個々の在り方や教育に対する考え方に触れることができ、今後教壇に立つ身として大きな刺激を受けました。



ハンドベルを持って演奏中！

執筆 神田 真帆（教育実践開発コース2年）

ご指導いただいている先生方の教育・研究

「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」

池田 隆 先生

いけだ たかし

大学院人間社会科学部研究科

特命准教授（主幹特任学術研究員）

専門分野：教員養成、教師教育、学校経営



終始優しい雰囲気、印象的でした

池田先生は、広島大学大学院を修了後、中学校の理科教諭として採用されました。教育委員会での行政職、さらには市立中学校での校長職を歴任されたその歩みは、常に現場での「実践」と「学び」の連続でした。現在は特命准教授として、主に地域教員養成プログラムを担当されています。

池田先生は、教諭時代から「生徒が安心して学べる学級」と「学習意欲を高める授業づくり」を何より大切にされており、その根底には、子どもと関わるのが大好きだという純粋な情熱があります。かつては厳しい教育現場もありましたが、決して逃げずに真正面から向き合い、本気で介入することで生徒との深い信頼関係を築いてこられました。体育大会や合唱コンクールで生徒と共に悩み、汗を流し、喜びを分かち合った記憶、そして卒業式で共に流した涙は、今も先生を支える大きな財産となっています。

池田先生は、「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」という言葉を座右の銘としています。子どもと真摯に向き合うことはもちろん、教育現場で求められる役割が日々変化する現代だからこそ、教師自身が常に学び続ける必要があると考えておられます。この学び続ける姿勢こそが、困難を乗り越える原動力であり、子どもの心を動かす鍵であると信じておられます。教師という仕事には、直面する困難をはるかに上回る大きなやりがいがあると語る池田先生は、自分自身の成長を止めず、子どもたちの未来のために共に歩む覚悟を持った学生や先生たちを、心から応援されています。

執筆 平川 瑞希

（教育実践開発コース2年）

近藤 妃奈乃

（教育実践開発コース1年）

「くせ字」を改善した経験から書写教育のご専門に

松本 仁志 先生

まつもと ひとし

大学院人間社会科学部研究科 教授

専門分野：教科教育学、国語教育



私たち院生の背中をおしくたさる、あたにかい先生です

松本先生は、国語教員を志して大学に入られた後、次第に「文字を書くこと」の教育へと傾倒されました。きっかけは、恩師の先生のご指導のもとで、ご自身の「くせ字」を改善された経験からです。改善の視点や方法、学習者の実態把握や改善策の提案など、実践的なスキルの重要性に気づかれたことから、書写教育の意義と可能性を見出されたと振り返られました。

その後、文字の習得に苦勞したり、書くことに苦手意識を持ったりする子どもとの出会いを経て、現在は主に書写教育を専門とされています。並行して、学生時代から関心を持っていた筆順についても研究を続けられているそうです。

研究を支える言葉として、二つの座右の銘を挙げられました。一つ目の〈随処如樂〉は、恩師から贈られた扁額に書かれていた言葉で、どのような場所や状況でも楽しむ心を忘れないという意味だそうです。二つ目の〈一華開五葉〉は、修学旅行の引率で訪れた京都のお寺で出会われた言葉で、一つの花が咲いて五枚の葉ができる、因果により形成される自然な流れを意味するのだそうです。「楽に流されるのではなく、因果を含むありのままの現状を受け入れ、前へ進む姿勢を大切にしたい」とおっしゃっていました。

最後に、院生に向けてメッセージを下されました。「自分にとって興味・関心が高く、楽しめる研究テーマと出会えるとういことです。そのテーマによる研究で学習者が成長・変化する姿を想像してみてください。あなたの気持ちの高ぶり具合が、研究テーマを決める物差しになるかもしれませんね。研究に向かう私たち学生にとって、改めて自分なりの研究のコアやストーリーを大切にしていきたいと思えるようなお話を伺うことができました。

執筆 島田 奈千花

（教育実践開発コース2年）

松山 蒼

（教育実践開発コース1年）

座右の銘は「塞翁が馬」楽しみながら一歩ずつ

松浦 武人 先生

まつうら たけと

大学院人間社会科学部研究科 教授

専門分野：授業構成論、学習指導論、算数科教育

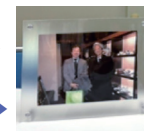


いつも、院生に寄り添ってくださる先生です

「初等教育における確率概念の形成を意図した学習材の開発」に取り組む松浦先生。研究の原点は、恩師の一人でもある筑波大学附属小学校の坪田耕三先生による「くじ引きの授業」でした。「確率は中学校の指導内容ですが、その授業では、小学生がくじ引きを楽しみながら、比や割合の考えを活用して確率判断をしていました。確率の学習では、遊びの最大の特性と称される不確実性を学びに生かすことが容易です。また、ヒューリスティクスに基づく誤判断と試行結果とのずれが生じやすいことも確率の学習の面白いところ」と松浦先生は語ります。現在は幼児期まで対象を広げて研究を展開。「幼児期でも『絶対当たる』『たぶん当たる』『たぶん当たらない』『絶対当たらない』など、直観的に当たりやすさを判断することができます」とのこと。

座右の銘は「塞翁が馬」。「幸せな時は気を引き締め、しんどい時はこのしんどさが将来の幸せにつながるだろうと信じて明るく前進」が松浦先生の流儀です。キャリアも「塞翁が馬」です。田舎の小規模校に勤めたいという希望が叶わず赴任したマンモス校では、研究開発の会議の膨大な議事録の作成と整理に追われて苦勞しましたが、その経験は、難解な文章を読解したり長文を要約したりする力につながりました。日本人学校への赴任を管理職に止められたこともありましたが、その後、附属校へ異動することになり、念願の複式学級の担任や、現在の教員養成の仕事、多くの日本人学校との交流の仕事につながりました。また、博士号を取るための附属教員・大学講師を務めながらの論文執筆では、睡眠時間が週10時間という過酷な時期もありましたが、すべてが今に生きています。「どんな時も明るく前進」の精神で、置かれた環境を楽しみながら一歩ずつ進みます。

坪田先生との写真は、研究室に大切に飾っているとのことでした。



執筆 手島 市裕

（教育実践開発コース2年）

佐々木 海翔

（教育実践開発コース1年）

編集後記／第16号

広島大学教職大学院ニュースレター第16号をご覧いただきありがとうございます。今年度初めての号ということもあり、新入生インタビューやリニューアルした院生室について掲載しました。新たなメンバーと学びを深められることが楽しみです。最後になりましたが、お忙しい中インタビューにご協力いただきました先生方、院生の皆様、誠にありがとうございました。次号もお楽しみに！

担当／神田 真帆
（教育実践開発コース2年）

東郷 将也
（教育実践開発コース2年）